

ピートの絆は終わらない

評議員

平松紀代子

障がいのある子どもたちのニーズを受けて、今から四十年前（一九七七年）に活動がはじまつた家庭療育援助グループピート。私は一九八九年の秋に深田未来先生のフィールドワークの授業をきっかけに毎週土曜日の午後はピートで過ごすようになり、今もこうしてセンターや関わる持たせていただいている。ピートの子どもたちと過ごした時間は新鮮でしたし、お母ちゃんたちが背負つておられる「家族の責任」を間近で感じたことが、今の私の研究領域である家族関係や子育て支援に関心を持った原点です。

私がピートのボランティアをしていたのはわずか一年半ですが、濃密な時間でピートの思い出は数え切れないのですが……言葉での対話を難しい児童や歩いていた時、私が話しかけた言葉のうちの「りんご」という言葉に反応して「アップル」と言うではありませんか！なんとも多くの英単語が彼のなかに詰まってくれていることを発見したときの感動は忘れられません。ピートの仲間に限らずあらゆる人に、それぞれを見しては分からぬ奥深い「賜物」というべき輝く原石があるのだと感じさせられました。

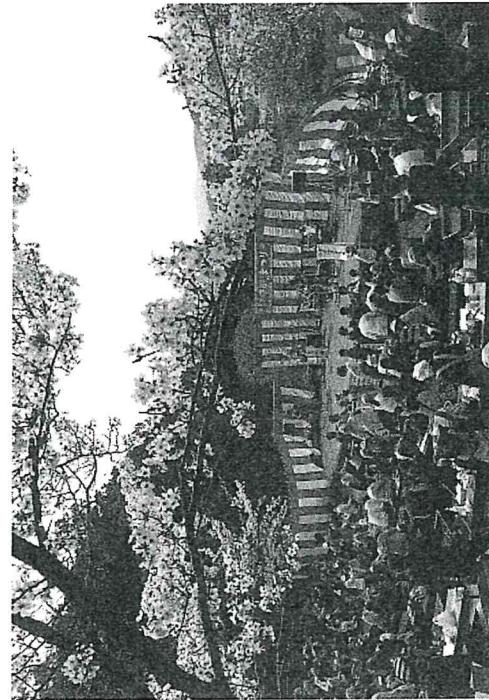
私がピートのボランティアをしていたのはわずか一年半ですが、濃密な時間で

した。ボランティア同士で熱く語り合うボラミが懐かしいです。水谷家にもお招きいただきたいのも良い思い出です。大学を卒業して十以上たつたある日、担当していたYくんに会いたくなつて、彼の職場に出かけました。神様はおられます。私が行くと、彼は建物の一階にいるのです！忘れられない。でも、せつからく来たので恐る恐る声をかけました。彼は私の顔を見るなりアッタックキヤンプを連想し「琵琶湖には行けません」と宣言するのです。どこの小学生が一年半、しかも週に一回しか関わっていない大学生のことを十年以上経つても覚えてくれているでしょうか。彼らの工具顔負けの記憶力に脱帽です。（元）子どもたちだけではありません、「セント」の行事でピートのお母ちゃんたちと再会すると「いやしきよちゃん！」といやしきよちゃん！』と

あの頃と同じように声をかけてくださるので、嬉しくて嬉しくて。こんな絆を今までつないでもらえて、センターやの存在に感謝の気持ちでいっぱいです。ピートの活動は一つの区切りの時を迎えます。寂しさを感じつつも、これは時代が移り変わるなかで、地域に彼らの居場所ができるからだと思います。ピートの絆は決して途切れることはありません。むしろ、今後それぞれのご家庭の事情が変化するなかで、支え合いが必要な場面もでてくるだろうと思うのです。そんな時に、セントを

当法人への寄付金は、課税控除対象となりますので、その為の受領書が必要な方はお申し下さい。

通じてピートボランティアの私たちもお役に立てる場面があるかもしれません。もうひとつの家族のようなあなたかいピートの絆を大切にしたいと思つて、これからもどうぞよろしくお願ひします。



笑顔と桜が花ざかりの桜まつり

地域生活支援ユース

西陣会ホームきたまち

自分らしさ暮らし、探してみませんか？

所長 宮崎一 弥

二〇一二年、西陣会においてグループホームの運営が始まりました。「暮らしの場」の福祉サービスです。元々ニーズがあつた「暮らしの場」の支援を開始するにあたり、法人内においてもティセンターフラットや地域活動支援センターふらっと等のご家族や関係者の皆さまとのお話であつたり、情報提供を頂いたりしてきました。

そのような中から「本人の主体的な生活」を考えるうえで、入居者の一人ひとりの特性に合った色々な生活スタイルを知るために、循環型のグループホームとして、西陣会ホーム「となり」は運営してきました。おお

よそ二年という区切りの中で、入居者の意向も含めそれを確定していきます。

その後の入居先を考えるにあたり、私たちも新たなグループホーム建設のお話や情報提供を受けたりしながら検討を進めていました。ただ、既存の建物をグループホームとして活用するためには、建築基準法（用途変更にあたり確認申請書や検査済書などの書類の準備）消防法（スプリンクラー）をはじめ、様々な消防設備の設置や避難経路の耐火壁化の課題をクリアせねばなりません。大規模改修の予算と時間もない中、新たな取り組みとして、二〇一五年には「シェアハウス小松原

の家」の取り組みが開始し、新たな生活スタイルを提示できました。そして、二〇一八年、上京区北町におけるグループホームとワンルームマンション（支援が必要な場面ではヘルパーを利用し、夜は常駐の管理人を配置している、サービス付き障がい者住宅）として、これまでにない暮らしのあり方をお伝えすることができるように思います。

それぞれの個々の特性などに合わせた、本人中心の生活のあり方を考える。親亡き後の生活の確保だけではなく、本人らしく暮らせる場所を選んで頂きたいと切に願います。

年をとっても今住んでいるところでいつまでも暮らしきりたいと思っている人、元気なうちはグループホームが良いかなと思っている人、一人で暮らしたいけど、まだ自信がないので、支援を受けながら暮らしたいと思っている人。いつかは一人暮らしをしたいと思ってる人。一人ではなく、二人暮らししたいという人。

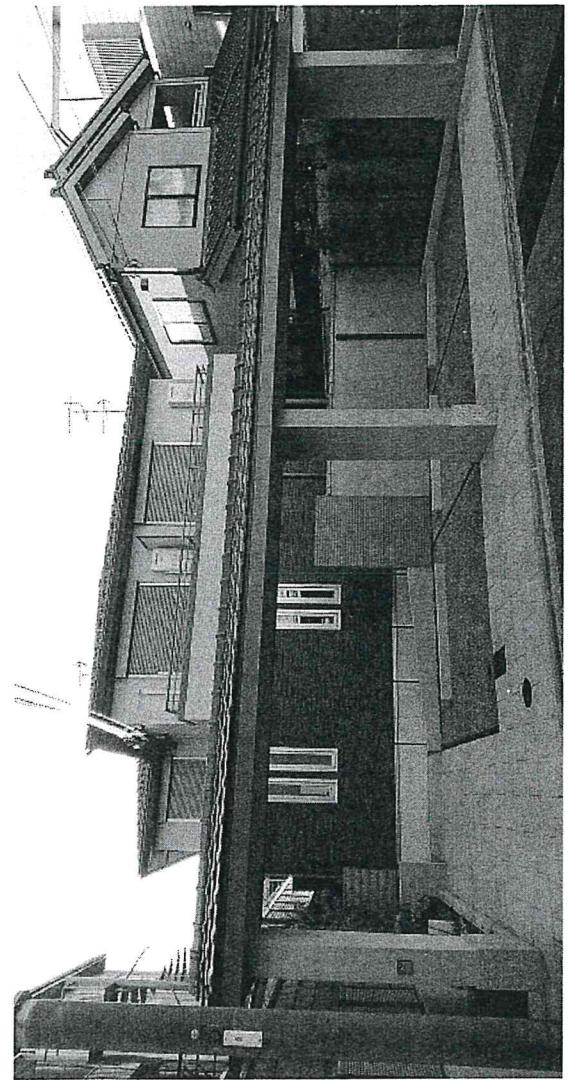
よく分からぬけれど施設よりは良いと思う人など、「暮らしの場」というのは色々あつて良いのだということを知って頂きたいと思いま

す。そして知るだけではなく、是非体验して頂きたいと思います。そこではじめて「自分らしさ暮らし」というものに一歩近づいていくのではなく、別のある場所を選んで頂きたいと切に願います。

必ず、見つかります。自分らしくあることがで

きる家、地域、仲間。一緒に探しましょう。

今回のかたまちの家がその一歩になれば、本当に嬉しいです。



西陣会居宅サービス係

それぞれの生活に寄りそつこと

副所長 山本みちる

今年は桜の花びらも早く咲き誇り、日に日に春の暖かさを感じるようになつきました。

支援費制度から早十五年が経ち、新たな制度が次々と出てくる中で、生活のしづらさを抱えていらっしゃる方に、少しずつ寄り添うことができるようになつてきています。

しかし、まだまだ足りていふことはいえない現状にあります。

何が足りないのか？

それは、人それぞれ、生活環境によって大きく変わつくると思います。

この先、「ご利用者みなさんが足りないと思われていることが足りるようになるまで、数年、いえ何十年もかかるでしょう。」

私たちができることは、日々、「ご利用者」と過ごし

話せる、「ご利用者の意思を感じ取れる時間が、居宅の支援にはあります。その中で、「ご利用者の必要」と感じておられることで、制度のはざまに入り込んでしまうことでも、少しでも寄り添つて支えていくようにしていきたい。

また、「ご利用されるみなさんが安心して使えるような、制度になるように声を上げていきたい」と思っています。

来月五月には、きたまちをはじめ、新たな場所で、新たな生活をはじめられる方が十五名いらっしゃいます。もちろん、制度で支えきれないことも多々生じてくると思います。

「ご利用者それぞれの「足りないこと」」を知り、「ご利用者が安心して生活できる『春』が迎えられるよう、職員一同、努力していくます。

デイセンターからこと

第二三者評価を受けて

副所長 本林直人

先日、第二三者評価をうけました。一〇〇三年に知的障害者デイサービスとして始めてから、十五年が経ちました。これまででも体制や活動内容などの見直しを行ってはきましたが、もっと大切にすべきこと、まだ聞けていないご利用者さんのお思いなどに気づき、よりよい活動をおこなえると考えて評価を受けることにしました。

評価の内容としては、事前の自己評価チェックやご利用者・職員へのアンケートを集約して（全利用者・職員からランダムに選び、大体半数の方が対象となる）評価機関に送ること、訪問調査により、自己評価の聞き取り確認や、「ご利用者・職員からの聞き取り、活動の見学などがありました。自己評価を皆としている中

でも強みや弱みを気がつくこともあります。第三者からのご意見ご指摘も大変参考になる機会となりました。強みの一つである地域とのつながりは、西陣会がきてからとても大切にしてきた部分であり、今後も力をいれて

は、情報の共有や周知、書類の整備や見直しなどで、不十分なところがあります。

この記事を書いている時点で、評価結果が届いてはいませんが、ただ受けただけとならずに、結果を皆で

共有し、改善していきたいと思います。またご利用者からも話を聞く機会も増やしていきたいと思っています。

二〇一八年度は、法人で新しい事業が始まり、生活環境の変わるご利用さんが数名おられます。デイセンターフラットで過ごされる時間は勿論のことですが、それ以外の時間でも安心して生活してもらえるように一緒に考えて実行していきます。



姫路セントラルパークへ

ショートステイゅう

2dayストレーニングを受講して

所長寺田 文

今年の一月、自閉症eサービス@阪神が開催された「2dayストレーニング」を受講させて頂いた。このセミナーは、自閉症の診断を受けておられるモデルの方に協力して頂き、受講生がグループになって「本人の事を知り」「どのように支援したら良いかを考え」「考えた支援を提供して」「もつと良くなるように再度考え方」を行う実践形式のものである。同様のセミナーを入職数年後に受講しており、今回は約十年振りに受講させて頂いた。この十年間を振り返ると、得たものもあれば失ったものもあり、置かれている立場も大きく変わり、十年前とはまた違った学びや刺激を得た機会となりました。



ゆうのうどんやさん@桜まつり

ショートステイは不定期で間隔の空いたご利用（宿泊）や緊急的な依頼が多いため、前回と今回での体調や状況変化、または初めて会う方が求めておられる事をその場で感じて・考えて・柔軟に提供する事が求められます。

ただ、その柔軟という事は支援者の都合によって行うもので無く、根底には障害や疾患の特性理解、何よ

りその人自身の興味関心や出来る事、求めておられる事など「ご本人」を中心には捉えて行う必要があると、今回のセミナーも通じて改めて感じています。

一〇一八年度、新たなグループホームや事業開始の中で、ゆうに関わる人で新たなステージに発たれる人も多く、ゆうにとつても一つの転機を迎える年度にな

ると思います。そこで新たな出会いもあるかと思います。「ご本人を中心に」を忘れず、一〇一八年度も進んでいきたいと思います。

地域活動支援センター「ふらつと」

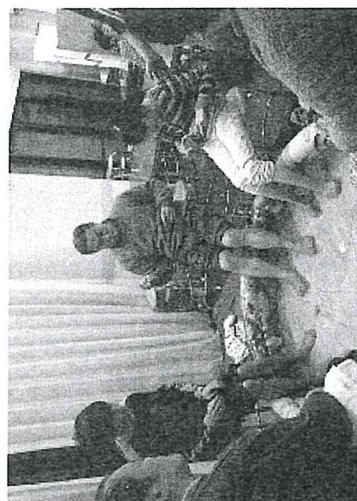
地活ふらつの活動の様子をお知らせします

鬼塚 義正

今回は、地活ふらつと（夜ふら）の様子を少し紹介させて頂こうと思います。

月曜ふらつと

『足湯』



今までやつたことのない初めての活動『足湯』。何とも言えない、まつたりとした表情で足湯につかる皆さん。気持ち良さそうですね！

水曜ふらつと

『ヌーラー』

インド料理専門店のヌーラーにいきました。自分の顔より大きなナンに驚き、



本格的なカレーを味わって楽しみ、人気の活動の一つです！

金曜ふらつと
『ボウリング』

やっぱりミニティングの時にでも必ず出てくる人気の活動ボウリング。皆さん、やり慣れているので、本当に上手にされます。



支援センター「きらりんく」

北部圏域相談支援座談会

相談員 小野紀代子

きらりんくでは、北区・左京区の相談支援事業所（開設予定を含む）に向けた研修事業として「北部圏域相談支援座談会」を開催しています。今年度は、計画作成をテーマに三回の連続講座を企画し、手順の確認から計画書の完成まで、現場で役立つ考え方・技術を継続的に学びあう内容としました。

受講者は現に相談支援専門員として勤務している人にとどまらず、今後着任予定である人など、計画相談への高い関心がうかがえました。

グループに分かれての演習では、模擬事例を用いてニーズを整理し、それをもとに完成させた計画を見ながら意見交換を行いました。計画作成が単なるサービスの調達方法ではなく、利用者の本意に沿ながら強み

などを活用し、その人の願いや目標に近づいていくための仕掛けであると再確認できました。

終了後、受講者からは「利用者のニーズをどう表現したらいいか分かった」「いろいろなアイデアや視点を他の参加者から分けてもらえた等の感想が聞かれました。

限られた時間ではありますが、さまざま立場の受講者の交流も得られた研修でした。現在している私にとっても、利用者の思いを受けとめながら計画に反映していく過程そのものを体験する学びとなりました。今後、計画相談支援に携わる仲間が徐々に増えるよう、さらに工夫をこらした研修を開いていかないと考えています。

支援センター「にじじん」

改めて、災害時の備えについて考える

相談員 藤原暢子

三月九日、京都市中部障害者地域自立支援協議会災害支援専門部会の講演会にヒューマンネットワーク熊本の吉村千恵氏をお招きし、一昨年四月に起きた熊本地震での被災経験や前後での取組みについて、お話を伺いました。

吉村氏は、熊本地震前より、熊本学園大学の講師に就いておられ、「災害と福祉」について考え、個別避難計画では、どういう人達に助けを求めるか、どこに逃げて、車椅子なら避難所のどこに居ると良いか等細かい所まで考えて作成され、炊き出しでは、実際に学生達をグループに分け、想定された環境で三百名の食事を作ることを学内で行う等、実践的な取組みをしていたと聞きました。

十四日夜の前震直後から、熊本学園大学には多くの住民や学生が集まり、十六日深夜の本震後さらに人々が溢れる状況で、十六日午後には学内ホールを開放して

福祉避難所を開設し、教員と学生が主となり、事前に行っていた取組みを活かし、当事者団体や専門職等の手助けを受けながら、四十五日間運営されたとのことでした。

お話の中で印象に残っているのは、取組みの全てが実際に照らし合わせて、公助・共助・自助に分けて考えられていること、それが被災前も被災後も続いていることでした。そして、吉村氏の「緊急時に公助は間に合わない。いかに最初の数日を持ちこたえるかだ。」との言葉にハツとしました。自身が東日本大震災、熊本地震が起った後に何を備えられたかというと、おぼろげに公助を考えたり緊急時シートを準備するに留まっています。今なら、もっとと考えることが出来る。私達がお手伝いしている方々がますます数日持ちこたえるために、具体的なイメージを持って取り組んでいきたいと思います。



ザ・ビール隊

ディのギヨーザやさん
笑顔でおもてなし@桜まつり好きですかー ジャム支援センターチーム
笑顔で

路地裏ステーションズ

西 廈 兒 童 館

春へ新たなつながりへ

本多智美

あたたかい春は、卒業とともに、入学や新生活のシーズンです。

糸便りタンセ

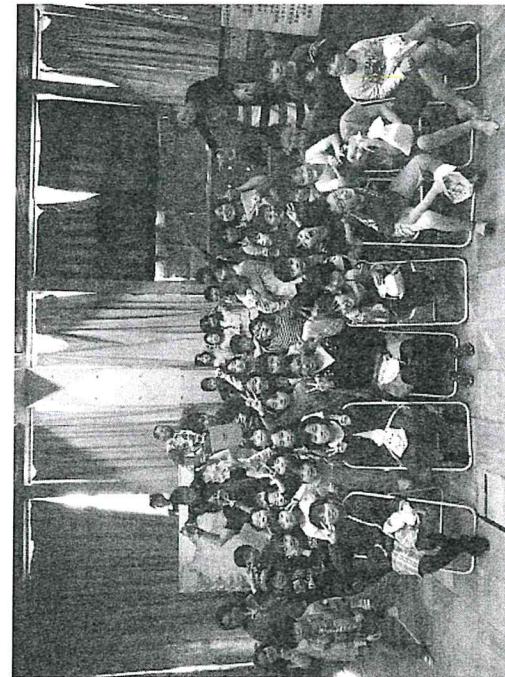
学童クラブでは、毎年三月に「卒部式」が行われます。現在六年生まで学童クラブを利用できますが、みなそれぞれのタイミングで卒部していくきます。しっかりと留守儿童番ができるようになります。二、四年生頃に卒部する子どもが多いです。

そんな中、六年間学童クラブに通い、今年卒部する六年生の男の子がいます。少ししづつ同学年の友達が卒部してしまい、いつのまにか年下の子どもたちばかりになってしまった。六年生と一・二・三年生……力の差もあり、興味も違います。寂しい思いもあつたと思います。そんな中、年齢関係なくやんちゃに遊び、年下の子どもたちに合わせたりもしながら、優しく面白く遊んでくれました。皆から慕われ、今では周囲の憧れの的です。

卒部式での出し物を募集すると、いつも遊んでいる年下の友達から、彼のため年に何かしたいといいう声があがりました。彼が好きなアーティストの曲を演奏したいそうです。この文章を書いていいる頃は、まだどんなものになるかは分かりませんが、きつとこの思ふにとつて忘れないとなるでしょう。

「大丈夫だろ」といいます。「お母さんと一緒に幼稚園に通う子供たちや、保育園に復帰されたお母さんの方も、お子さんと一緒に乳児用ラブに立ち寄るまでと違うところなど、新たな場所に飛び込む方法もいらっしゃいます。





滋部に向かつてはばたけ。」(滋部牛奉贈文)

うか」という不安でいっぱいだと思います。そんな時は一年前を思い出してみて下さい。あの時できなかつたことで、今までできていることがたくさんあるはずです。自分の後ろには運んできた道があります。その道はこれからの大好きな力となるものです。そして、子育て仲間から得た新たな道へのヒントもあります。自信を持つてこの先の道を進んで行ってください。

今までに出会った人々、これからも出会う人々、一人ひとりが大切なつながり॥絆です。新しい年度、児童館からばくまれていいく絆を楽しみにしています。

正直に告白しま。

実は、春が嫌いでした

そして今年は、「ゆうたかん」から教えられた特別な春を迎えました。

「ゆうたばんやで」
「ゆうたばんは？」
「ゆうたばん、いる

六年前の春、「ゆうたぼん」はS君とうしょにやつてきました。S君と話しているとき、散歩しているとき、遊んでいるとき、トイレに行っているとき、見えない「ゆうたぼん」がいきなり現れては消えていくことがよくありました。

「ゆうたばん」は、はたしてヒトなのか？ モノなのか？ 本当にいるのか？ 正体をつかもうと必死でした。しかし、いくら頑張っても正体はつかめないどころか、S君との関係もよく

京都市障害のある中高生のタイムケア事業「ういす

副所長 小 西 秀 和

なりませんでした。そんな
謎解きが続いていたある日、
苦しまぎれに言つてみまし
た。

「ゆうたほん、いるね」

それを聞いたS君の顔は、今でも忘れられません。それから五度目の春を迎えるS君も卒業していきました。

「出会い」の前に「別れ」のある春が、ずっと好きになれませんでしたが、今年は違います。「別れ」や「出会い」は、目に見えるその瞬間の出来事です。しかし、「ゆうたばん」の存在や、ともに過ごした時間という目に見えない蓄積された事実こそが、心をあたためてくれるのだと教えられたからです。

そんなことを感じる春、
好きになりました。

